

真宗文庫

浄土真宗の教え
— 真実の教・行・信・証 —

宮城 顛



東本願寺出版

目次

● 眞実の教……………9

- 一 眞宗の教えとは 10
- 二 思いに生きる私たち 18
- 三 「さわり」によって破られる思い 21
- 四 いのちの営み 27
- 五 動詞で表現される世界 33
- 六 亡くなって初めて遇える親 39
- 七 喜んで死んでいける道 44
- 八 「現世の利益」と「現生の利益」 46

●真実の行……………53

- 一 教信行証ではなく教行信証 54
- 二 「名利」という問題 59
- 三 念仏の歴史 64
- 四 願も行もそなわっている名 72
- 五 名にまでなった仏さま 79
- 六 人間としての感覚 84
- 七 感覚を呼び覚ます念仏 90

●真実の信……………97

- 一 信心とは 98
- 二 信心、それこそが救い 108

- 三 法を閉ざし、自分を見失う 114
- 四 なんでもわかっているつもり 私 121
- 五 「いのち」を見失った現代 126
- 六 如来の心を生きる生活 130

● 眞実の証

- 一 未来によつて人は決まる 134
- 二 私のあり方を悲しむ如来 142
- 三 救われるはずない私・すでに救われている私 146
- 四 人間が人間として生きる道 152
- 五 「眞智は無知なり」 156
- 六 分別に生きる私 161
- 七 喜・悟・信の三忍 169

八 確かな世界をたまわる 174

●真実の浄土（真仏土）……………183

一 仏教は来世を問わない 184

二 願いの世界 189

三 いのちで感じ取る世界 195

四 共に生きる 207

五 穢土を離れて浄土はない 215

六 はたらきかけてくる浄土 220

●方便の浄土（化身土）……………225

一 方便とは 226

- 二 仮令の誓願と果遂の誓い 232
- 三 自分のあり方を知る 240
- 四 濁世の群萌としての私 246
- 五 自己満足の世界 251
- 六 悲しむ心を呼び覚ます 257

・本文中の真宗聖典とは、東本願寺出版発行の『真宗聖典』を指します。

眞実の教

一 真宗の教えとは

真宗しんしゅうの教えを学ぶ時の根本聖典で、親鸞しんらん聖人しょうにんの著作である『顕浄土真実けんじょうどしんじつ教行証文類きょうぎょうしやうもんるい』（教行信証きょうぎょうしんしやう）の最初の「教巻きやうまき」には、「それ、真実の教を顕あらかわさば、すなわち『大無量寿経だいむりやうじゆきやう』これなり」（真宗聖典一五二頁）と掲げられ、『大無量寿経』とはどういうお経かということが釈迦しゃか・弥陀みだ、二尊にそんの徳をもつて語られています。一言で言えば、本願ほんがんが説かれていたる経典です。

『無量寿経むりやうじゆきやう』、『観無量寿経かんむりやうじゆきやう』、『阿弥陀経あみだきやう』を浄土三部の経典、「三部経さんぶきやう』と言います。「真実の教を顕さば、すなわち『大無量寿経』これなり」と言われる『大無量寿経』とは、ともすると『無量寿経』の別称と考えてしまいます。しかし、親鸞聖人がここで言われている『大無量寿経』とは、三部の経典『無量寿経』、『観無量寿経』、『阿弥陀経』となつて、本願が私たちにまで届けられたという広い歩みを持った経典、その全体を押さえられているわ

けです。

親鸞聖人は言葉に非常に厳密げんみつな方で、他の所では非常に長い古い經典の名前でも全部正確に書いておられます。ですから、その親鸞聖人がいちばん大事な所で略称を用いられるはずがないのです。

『無量寿經』に本願が説かれ、その本願が一人の人間の、具体的には韋提いだい希けという一人の凡夫ぼんぶを通して、本願がどのようにして私たちの生活の事実になるのかを説かれた『觀無量寿經』、そしてその本願を十方の諸仏しよぶつ方が正しい教え、それこそ真の教えだと讃嘆さんたんする經典が『阿弥陀經』です。その三部の經典となって私たちの上にはたらいてくださっている經典を『大無量寿經』と押さえてくださっているのです。その三部の經典によって、「真宗」という宗の名のりが立てられてくるわけです。

その「真宗」とはどういう教えかということ、非常に具体的に私に教えてください。私がいまいた。私が本山の教学研究所に勤めていた時のことで

す。研究所の隣りには高倉会館という建物があり、毎日そこで法話会が開かれていました。私もその場でお話をする機会を幾度となくいただきました。

そこで、いつも前に座って話を聞いてくださっている一人のお婆さんがおられました。夜には「高倉同朋どうぼうの会」という集つどいがあり、話の後に座談会があるのですが、そこでそのお婆さんも発言をされ、それがまことにきちつと本筋を押さえた話で感心したことを覚えています。

ある時、そのお婆さんが私の控え室に來られ、「私の家は代々真言宗しんごんしゅうなのですが、私は真言宗ではどうしても救われません。縁があつてこの高倉会館で親鸞聖人の話を聞くようになって、私にはこの道しかないと思うしても思うので、なんとか真宗門徒になりたいのです。どうすればいいでしょうか」という相談でした。できれば私の寺の門徒にして欲しいということでしたので、今までお世話になつたお寺、それからご家族の了解を得て、その上でまたお話をお聞きしましょうということでお別れをしました。

ご家族の了解を得るため、そのお婆さんは御子息方に話をされたようです。御子息方といっても四十、五十の年齢の方々で、お医者さんや貿易会社に勤めておられ、普段はそういう仏事ぶつじはお婆さんに全部まかせつきりで、まったく無関心だったそうです。ですので、自分が「替わりたい」と言えば「勝手にすればいい」と言ってくれるかと思っていたら、「代々真言宗のお寺に世話になってきて、お母さんの考え一つでそれを替えるというのはどういうことだ。それはおかしい」と猛烈もうれつに反対されたそうです。それでそのお婆さんは困られたのですが、困ると同時に子供たちもただ無関心ではなかったのだということが分かり、逆にそのことは嬉しかったそうです。しかし、やはり自分は真言宗では救われなれないという思いが動きませんから、繰り返しそのことをお話になっていたようです。

そうしたある時、お婆さんは体の調子が悪くなり、病院で診てもらおうと胃い癌がんですぐに手術をしなければならなくなりました。入院していいよ手術を

受けるという前に、あらためてもう一度御子息方に、替わりたいという願いを言われたそうです。そこまで思い詰めているのならと、私のお寺へ来られました。そこでお勤めをして、御門徒としての歩みがはじまったのです。そして、お婆さんが帰られる時、「これで安心して悶えていくことができます」と言われました。

仏教の流れは聖道門しょうどうもんと浄土門じょうどもんとに別れます。真宗は浄土門で、真言宗は大きく言えば聖道門しょうどうもんです。真言宗にしても天台宗てんだいしゅうにしても、聖道門しょうどうもんというのは私たちが修行を積み善根ぜんこんを積み聖ひじりにまでなっていく道です。いろんな煩惱ぼんのうを持ち、いろんな過ちあやまを犯し、思い悩んでいる凡夫が、仏法を学び、仏法を実践し、善根を積み、向上していく道です。言うならば、それは美しく清らかなで強い人間になっていく道です。そこには、人間が本当に強い志こころざしを持って仏道に努めれば、人間はみんな清く美しく正しい存在になれるという、またならなければならぬという人間に対する見方が根っこにあります。

それに対してそのお婆さんは、そういう清く美しく正しい者が救われるという道は、私には道としてうなずけないと言っておられるのです。どう自分を振り返ってみても、決して清く美しく正しくなどということでは生きていけないし、生きてはいないと言っておられるのです。そしてこの年齢になって、またいろんな生活の問題を抱えて、今から清く美しく正しくなれると言われてみても、どうにもならないのです。

親鸞聖人の時代に京都の町々で人々が歌っていた詩が集められて、『梁塵秘抄』^{ひしやう}という本になっております。その中に「はかなき此の世を過ぐすとて、^{うみやま}海山かせぐとせし程に、^{よろず}萬の佛に疎まれて、^{うと}後生我が身をいかにせん」という詩があります。魚や動物を獲って生活をしていることは、いわゆる教えが禁じている殺生を重ねていくことです。清く美しく正しくということから言えば、決して自分を清く正しい者とは言えないのですが、それをしなければ生きていけないのです。そこに「萬の佛」に疎まれた者として、我が身の

後生をどうすればいいかという、言うならば絶望の詩です。とてもでないが、仏の世界へ生まれることはできないし、地獄に落ちることはもう目に見えているというのです。

そういう問題が、聖道門にはあるわけです。そこに説かれていることは、真なるもの、真まことの教え、言うなれば真理しんりです。ただその真理が、これこそが真理だと名のついても、普通の人々のようにその真理を自分の道として歩めない者にとつては、絶望を生み出すだけです。あそこに真理の高く掲げられた世界があり、そこに行けばその真の教えが聞けるのだが、そこには自分に行けないとなれば、その救われる道がそこにあっても私の事実にならないわけです。

「真実」と書きますが、これは真理が私の事実になるということです。「真実」という二つの字で、ただ真理、真、本当の事と一口で言ってしまうすが、分けて言えば「真理が私の身の上に事実となつてはたらく。そして、こ

の私を歩ませる」ということです。真理であるかもしれないが、私の事実にならない時には、私にとつては道ではないのです。

真理をいかにしてもすべての人々の上に事実として届け、開いていこうという仏の歩みが方便ほうべんです。方便ほうべんというのは、嘘うそも方便ほうべんとも言いますから、真実でないことのように思いますが、真なるものを実にする歩みです。真の教えというものを、私の事実、私の生活の事実にまで開いていこうということです。どこまでも人間に近づき、それがどんなに愚おろかであつても、人間の事実の中、そして人間の生活の上にもまで到達するということが方便です。その意味では、真宗は方便の宗教です。御本尊ごほんぞんの裏の「方便ほうべん法身ほつしん」という言葉や、お念仏が誓ちかわれている第十七願を親鸞聖人は「方便ほうべんの御誓願ごせいがん」（真宗聖典五八一頁）と言つておられますように、方便という言葉が大事な所で使われているわけです。

二 思いに生きる私たち

私が勤めている短期大学は二年で卒業しますので、二回生は卒業論文を書きます。その卒業論文の作成過程の中で、夏休み前にテーマを設け、発表してもらっているのですが、そこである一人の学生が「親鸞さまに遇^あえて良かった」というテーマで発表しました。自分が大好きだったおじいさんが亡くなり、そのおじいさんが「親鸞さまに遇えて良かった」ということを亡くなる前にしきりに言っていたと人から聞いたことから、おじいさんがそういう言葉でなにを言おうとしたのかを知りたくて、「親鸞さまに遇えて良かった」というテーマにしたと言うのです。

このおじいさんの思いは、親鸞聖人が、人間としての能力などが非常に優^{すぐ}れていた立派な方だったということでは決してないのでしょう。親鸞聖人がただ立派な人だというだけならば、私たちは立派な人に会った場合に、かな

らずしも良かったとは言えないのではないでしようか。立派な人にお会いすると、逆に自分がどうしようもないものとして見えてきて、絶望することもあります。

『歎異抄』^{たんにしやう}という書物の終わりの方に、「聖人のつねのおおせには、「弥陀の五劫思惟^{ごこうしゆい}の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人^{いちじん}がためなりけり。されば、そくばくの業^{ごう}をもちける身にてありけるを、たすけんとおほしめしたちける本願のかたじけなさよ」(真宗聖典六四〇頁)と記されています。「そくばくの業」の「そくばく」とは、漢字で「若干」と書きます。私は私の業を持ち、皆さんは皆さん一人ひとりの業を持って生きていますのです。

現代の私たちは、なによりも自分の思い通りに生きることが幸せとっています。自分の思いに忠実に生きることが、自分を大切に生きることだという感覚があります。それに対して「業」という言葉は、思いではどうにもならないのちの事実というものをあらわす言葉です。どれだけ自分が思いを

尽くしてみても、変えることも無くすこともできない、私の思いよりもつと深く、私をこういう形であらしめている力が「業」です。その意味で「業」という言葉は、私を縛りつけてくるものです。私を束縛してくるものです。言い換えれば、私の思い通りに生きようとする時に、いつもそれを妨げるものです。

先ほどと同じ卒業論文の中間発表の時に、一人の学生が「往生極楽」というテーマで論文を書くと言いましたので、「往生極楽ってどういうことかね」と聞きましたら、「往きて、生まれて、楽を極める」と言うのです。みんな吹き出しましたが、吹き出してから気が付いてみますと、だいたい人間が浄土などを求める時はこういうことなのです。

『観無量寿経』では、韋提希は、自分の息子によって国王であった夫を殺され、夫を助けようとした自分まで牢獄に閉じ込められたという絶望の中で、仏に「我がために広く憂悩なき処を説きたまえ」（真宗聖典九二頁）と「憂い

や悩みのない処」をどうか教えて欲しいと求めます。これはひっくり返して言えば極楽、楽を極めたいということです。

私たちの生活を見ると、私を憂い悩ませている人や物事がたくさんあります。少しでもそれを取り除いていけば、どんなにか楽な生活、楽しい生活になるだろうと、憂いなき世界を日々一生懸命に求めているのです。楽しい楽な生活が、ある意味で救いだと考えています。憂い悩ませるものの中には病気、経済問題、家庭問題もありますが、そういうものが一つ一つ取り除かれていけば、そこに、初めて私が私の思い通りに生きていける自由な楽しい生活が始まるはずだと考えているのです。

三 「さわり」によって破られる思い

先般亡くなった武満徹さんたけみつとあ（一九三〇～一九九六）は、日本の作曲家の中

でも特に世界で評価されている方でした。その武満さんは文章の中で「さわり」という言葉を取り上げておられ、日本人は「さわり」を大事にする歴史があると言っておられます。

特に雅楽がくですが、笙しょう、箏ひちりきなどの日本の楽器は、わざわざ「さわり」が付いてあると言っておられます。音がすーっと出るのではなく、出にくいように「さわり」が付いてあるということです。その「さわり」をくぐって音が出始める時、その音は実に自由な音色ねいろを持つと。私たちは「さわり」というものを、私の幸せを邪魔しているものだと思います、この「さわり」さえなくなればと思っているのですが、それに対して武満さんは、そうではなく「さわり」のあるところに実は本当の人間としての自由があるというのです。

つまり、「さわり」において初めて私たちは自分というものを問い、尋ね、そして自分というものを叫ぶのです。なにもかまが思いのままになる時には、人間は自分というものがわからないのです。極端なことを言えば、「お前の

命はあと一年もないだろう」と宣告され、死を自覚させられる時がこなければ、自分を問い尋ねることがなかなか始まらないのです。生にとって、人間にとって、死はもつとも究極的な「さわり」です。私はどこまでも生きていたい、思いはどこまでも生きていたいのですが、その生きていたいという思いを断ち切るものとして死があります。

元京都大学教授でギリシヤ哲学の世界的な権威であった田中美知太郎先生たなかみちたろう（一九〇二～一九八五）の言葉に「死の自覚が生への愛だ」というものがあります。

自分の死、この私が死ぬということを知らされたら、一日たりとて、それこそごろごろと昼寝はしてられません。たとえ一瞬でも、かけがえのない一瞬になります。初めて自分のいのちを大事に、自分というものが本当に生きたと言えるものがどこにあるかということが問われてきます。

親鸞聖人が問うておられました「そのこと一つ」というものを、曇鸞大師どんらんだいし

は「志願^{しがん}」という言葉であらわしています。それは言うならば、私のいのちの叫びです。この身に受けているいのちの持っている願いです。私がこの身に持っているいのちの願いというものに初めてふれさせられるのが、実は「さわり」においてだと言えます。思いのままに生きている時は、思いを破ることはなく、思いを超えることはないのです。

親鸞聖人が明らかにしてくださった教えは、「そくばくの業」つまり「さわり」に苦悩しているこの私に、本願が語りかけ、本願が照らしたもうことよって、そこに初めて私の上に、そのこと一つのためならば死んでいけるし、そのこと一つのためならば生きていけるといふ、「そのこと一つ」というものです。

真宗の「宗」、宗教の「宗」という文字は、二つの部分から成り立っています。「宀」は家、「示」は魂、「宗」という言葉の直接の意味は「ミタマよ」ということです。「その家のミタマよ」ということは、そこからすべての人

が生まれ出て、そして、そこへすべての人が帰るといふことです。金子大榮かねこだいえい先生（一八八一―一九七六）は「宗」というのは、生がそれにより、死がそれに帰する」と教えてくださっています。真宗というのは、本当にこの私が見えよによって生きていき、それによって死んでいけると、そういうところを「宗」と言います。

それは、なにかここまで登って来いと、ここまで立派になれと、そういう条件付きのところであれば、私にとって「宗」にはなりません。そこに「そくばくの業をもちける身」、そういう苦悩を抱え、迷い、悩み、そういう身のまま、しかも、そういういのちに呼びかける、そういういのちを照らし出してくださる世界が、ここにあることを明らかにしてください。それが親鸞聖人です。

「親鸞さまに遇えて良かった」といふことは、親鸞聖人という理想の人が見つかったということではありません。「そくばくの業」に悩むということ

から言えば、業の内容は違いますが、どんな人でもそれぞれに、みんな一人ひとり同じ「そくばくの業」を持って生きているわけですが、「親鸞さまに遇えて良かった」ということは、私は私の業を生きていけばいいのだと教えられたということです。〳親鸞さまに遇えて、初めて私は私に帰れた〴〵ということを、そのおじいさんは言われたのです。聖道門は「ああいう人になれ」と理想の人を掲げて「そこまで来い」と言われるが、それに対して本願の道は「汝のなんじいのちの事実じじつに帰れ」と、「そしてそこを生きよ」ということを知らしてくださるのです。そういう道を歩まれた親鸞聖人に遇えた時に初めて、こういう「そくばくの業」の中に道があるということことをうなずくことができたと喜びを、そのおじいさんは言っておられるのです。

私たちの常識から言えば、死というのは生を否定するもの、打ち切るものです。田中美知太郎先生の「死の自覚が生への愛だ」という言葉に出遇うと驚きます。考えると、不思議な言い方です。

四 いのちの営み

今日の私たちのもののとらえ方は全部、名詞形、名詞です。そういうことを、立川昭二（たつかわしょうじ）（一九二七〜二〇一七）という先生が生老病死（しょうろうびょうし）を述べた本に指摘していました。日本人は古来、春夏秋冬の四季を、そのそれぞれの季節の美しさ、それぞれの季節の大切さ、そういうところで愛（め）でてきました。春は春を愛で、夏は夏を愛で、生きてきました。それと同じように実は、生老病死すべてをいのちの事実として生きてきたのです。

ところが今日の私たちは、人間の価値を一つの行為で量るようになりました。なにができるか、どれだけのことをしてきたか、というところで量るようになっていきます。人間の価値というものをそういうところで量るようになれば、当然若くて元気であることが、まずなによりとなるわけです。

「老後」という言葉について立川さんが、これは明治になってから日本に

入ってきたというか、日本で使われるようになったと指摘されています。では、明治以前にあつてはどう言っていたのかというと、「老いに入る」、「老入る」と動詞で言っていたそうです。「老後」というのは一つの名詞、「老」という名詞でとらえているわけです。「老い」ということを一つの歩みとしてとらえ、「老いに入る」とおもしろいとらえ方をしていたそうです。つまり命が「老い」という新しい状態に「入」っていく、そしてそこで「老い」という新しい生活を始めるということです。

「老いに入る」という言葉で思い浮かびましたのは、加賀市大聖寺の和田^{わだ}稠^{しげし}先生（二九一六〜二〇〇六）です。私より一回り以上も上でしたが、お忙しい方でなかなかお会いすることがありませんでした。私たちが何年来続けていました聞法会があり、その時にお会いするくらいでした。一年ぶりにお会いした時に、先生が私の顔を見るなり「宮城さん、おもしろいね！」と言われるのです。「なにかおもしろいことがありましたか」と言ったら、「うー

ん、足が曲がらなくなつてね」と、また「耳が遠くなつてね」と言われるのです。「そんなことがおもしろいですか」と言いましたら、「うん、初めての体験だからね」と言われました。

つまり、「足が曲がらないというのは、こういう生活になるのか。耳が遠くなるということは、こういう思いをすることなのか。初めてわかった。毎日新しい体験をさせてもらっている。おもしろいね」と言われるのです。これが「老いに入る」ということでしょう。それはまったく新しい体験であり、そういう新しい世界に入っていくということです。

若さに価値があり、元気なことに価値があるというところに立っていると、「老後」というのは社会からある意味で「もう必要ない」、「あとではできるだけ邪魔せずに生きていなさい」という感じですね。どこか後ろ向きな、侘^{わび}しい響きが「老後」という言葉には出てきます。それに対して明治までは、日本人は「老いに入る」と言っていたということを立て川さんが書いておられて、

大切なことを教えられました。

今日たとえば「死」ということも、私たちは名詞でとらえています。そうすると、人間の死というものはなにをもって判定するかということになってきます。なにをもって死と認めるか、脳死すればもう人間ではないというような「判定」がそこで議論されてきます。

五木寛之いっきひろゆきさんの『大河の一滴』という本の中に出ていることが思い出されず。ある家で、お婆さんの最期が近くなり、親族の者が周りを取り囲んで見守っていました。そしてお医者さんが頭を下げて「ご臨終りんじゅうです」と言います。すると親族の一人が「ああ死に水まづみ（末期の水）をとらなければ」ということで、そのための綿わたを探したそうです。ところがどこを探しても綿が見つからないので困っていたら、死んだはずのお婆さんが「タンスの上から三番目の左側」と言ったというのです。五木さんはまじめに書いておられますから、笑い話ではありません。だからやはり、そういうことがあったのでしょ

う。それで、「ここにあった」と綿を持ってきて水を口に含ませた時には、本当に亡くなっておられたのだそうです。それを読んで気が付かされることは、この頃は末期の水を亡くなる人におけるなどということをしなくなったというか、できなくなりました。

私の母が亡くなった時も、お医者さんが母の体に機械を付けて、グラフがこの線から下へいったらもうだめですから見守っていてくださいと言うのです。そうすると、私たちはどうしても機械ばかりを見ながら、「あー危ないな、下がってきた」と、「また戻ってきた、あー良かった」と言っているわけ、母親の顔や、その場を見ていないのです。判定です。

昔は、これは動詞だったのです。やはり、「死んで往くいのち」なのです。「死んで往く」ということは、いのちでなくなるのではなく、いのちの営みいとなみなのです。「おぎゃあ」と生まれてくるのもいのちの営みなら、死んで往くのもいのちの営みです。ですから、「生まれてくるいのちはめでたい」と同

じように、死んで往くいのちも尊いのです。

昔は、親族が集まって死んで往くいのちを見守っていました。かつてはそれが普通の姿であったわけです。だんだん冷たくなっていく手足を少しでも温める。つまり、去っていくいのちを少しでも引き止めるといふか、そういう願いを持って、亡くなる人の懐ふところに手を入れたり、手足を一生懸命さすったということがあります。そこでは本当に、死んで往くいのちに寄り添い、死んで往くいのちと共に歩むような、そういう心で死を見つめていました。

それは名詞の世界ではなく、動詞の世界なのです。「死んで往くいのち」の営みです。私たちは「死」をいのちを断ち切る言葉としてしまった時に、そして「死」と名詞で語るようになった時に、なにか死ということを自分の外に置いて、ああだこうだとあげつらうことになってしまいました。すべてを名詞化するということが、今日の私たちのものの理解の仕方のようにです。昔は、もっとすべてのものと一つに生きていました。決して自分の外に、自

分と無関係にあるものとしては見なかったということ、あらためて思いま
す。この「死の自覚が生への愛だ」ということも、そういうところであらた
めて思われるわけです。

五 動詞で表現される世界

本来、仏教の基本の言葉は全部、動詞なのです。「如来にょらい」という言葉も、
私たちは如来さま、仏さまと言って前に置いてしまいました。そしてこちら
から「どうか救ってください」とたのむということになってしまいました。
「如来」というのは、「如」が「如」のままに私のところに「来る」と、そし
て「如」のままにして「去る」、にょらいによこ「如来如去」というのが言葉の意味です。
「如来」とは、私に限りなく近づき、私の上に真如しんにょなるものを開く、そうい
う歩み、そういう私へのはたらきかけであって、私と無関係に私の前におら

れるということではありません。

それから「浄土」ということにしても、「浄土」という世界を私たちの世界の外にたてて、ある意味で理想化して、そこへ生まれるということをお願いということがあるわけです。しかし、親鸞聖人は「浄土」について、「真実の浄土」というものを天親菩薩の『願生偈（浄土論）』の偈文の中の言葉に見ておられます。「究竟して虚空のごとく、廣大にして辺際なし」（真宗聖典一三五頁）、この言葉を親鸞聖人は真実の「浄土」を顕す言葉としてあげておられます。「究竟」、どれだけ多くの人がその世界に往きて生まれても、「虚空のごとく」、どこまでも廣大で、「辺際なし」、ほとりきわなしと言われ
ています。

もしも浄土という世界が、私たちが思い描く世界としてあるものだとしたら、その世界がどんなに広大な世界であろうと、百人がその世界に生まれたら百人分その世界は狭くなる道理です。迎え入れる浄土と、その浄土に生ま

れる人とが別々ならば、百人生まれば百人分、一万人生まれば一万分その世界は狭くなります。それは広大だから狭いとは感じないでしょうが、しかし事實は狭くなる道理です。決して究竟、どこまで行っても「虚空のごとく」というわけにはいきません。

では、天親菩薩はないことを言われたのか、そして親鸞聖人はそんな言葉を真実の浄土を顕すと尊ばれたのかということですか。どれだけ多くの人がその浄土に生まれようと、虚空のごとく広大にして辺際ないというあり方が成り立つ唯一の場合は、それは浄土に生まれた人が、今度は浄土を開いていく場合だけです。その場合は、百人生まれたら百人分、浄土が広がるのです。浄土に生まれた人が、浄土という世界にあぐらをかいて、腰を下ろして、それこそ「あー楽しい世界だ」と言っているのですから、どれだけ広い世界であらうと、それは狭くなる道理です。

浄土に生まれんと願う心を「願生心がんしょうしん」と言います。そして、「得生とくしょう」と言

います。「生まれ得た」「浄土に生まれることができた」「生まるることを得」ということですが、ここで腰を下ろしてしまうことを親鸞聖人は真実の浄土ではなく「化土けど」と言われます。

真実の浄土とは、その浄土に生まれたら浄土のいのちを生きるものとなるということですが、つまり浄土は「願」、がんしん「願心」によって建立された世界です。ですから「願生」が「得生」となれば、今度は「願」に「生きる」身となつて生まれ出るので。生まれんと願つて浄土に生まれたならば、浄土の「願心」、浄土というものが建立されたその「願心」を生きるものとして生み出されるのです。

ですから曇鸞大師は、その浄土を明らかにされた『浄土論註』じょうどろんちゆう（論註）の中で繰り返し、浄土に生まれたら浄土のいのちを捨てると、あるいは浄土に生まれたら彼の寿命かを捨てると言っておられます。浄土に生まれて浄土に腰を下ろすなら、それは、本当に浄土に生まれたものではなく、自分の思いを

浄土に持ち込んだだけです。浄土において自分の思いを満たそうとしているだけです。浄土に生まれるということは、浄土のいのちに生きる身となることです。それは、浄土を開かれた願いに生きる身にされることです。

親鸞聖人は「真実のさとり」、「真実の証」というものを顕かにされるところに、この『論註』の言葉をずっと引かれています。その中の阿弥陀如来の功德を称える偈文のところ、「もし人ひとたび安楽浄土に生ずれば、後の時に意「三界に生まれて衆生を教化せん」と願じて、浄土の命を捨てて願に随いて生を得て、三界雑生の火の中に生まる」（真宗聖典二八二頁）とあります。三界を捨てて安楽浄土に生まれたのですが、この浄土に生まれた人は自分の心に「三界の衆生を教化せん」という「願」を起こして、実は三界雑生の火の中に浄土を開いていくのだと、曇鸞大師が書いておられます。

それを親鸞聖人は、「真実の証」とあげておられます。ですから、「浄土」という言葉の本質は、「浄土していく」、国を清めていくという動詞なのです。

また「念仏」ということも、「お念仏」というものがあるのではなく、「お念仏する」という事実、念仏申している人がいるということ。頭で対象的にとらえる言葉としてたてられているわけではなく、すべてが動詞としてあらわされています。

そういう点、私たちは今日あらゆるものを対象化してしかとらえられなくなってきたおり、その意味では、学ぶことによつて、いよいよ心が離れていくということもあります。仏教について学ぶことと、仏教の願いにふれることとは、必ずしも一つにはならないということもあります。そういう悲しみを含めて、私たちは抱えています。蓮れん如上にょしょう人がすでに、そういうことを「聖しょう教ぎょうよみの聖教よまずなり」(真宗聖典八七三頁)という言葉で言っておられます。そしてまた、浄土というものは「彼の国」とか「彼の岸きし」と言います。これはこの世界ではないということ。ですから、私たちの思いをどれだけ広げていっても、それは浄土にならないということが「彼の」という言葉

であらわされているのです。

六 亡くなって初めて遇える親

私の友人に、寺の長男に生まれた人がいました。その父親は、私の父の友人でもあったのですが、各地を回って真宗の教えを伝えていくことに生涯を尽くされた方でした。それだけに、その友人は小さい時から、自分の志を継いでその寺の住職となり、教えを伝えて欲しいという願いをかけられ、ある意味で強制的にそういう道を歩めと、ことあるごとに言われたらしいのです。父親同士が友人でもありましたから、大学時代から年中その友人の寺へ行っていたのですが、その親子喧嘩というのが物凄いです。お父さんも激しい人であり、その息子である私の友人も激しい性格でしたから、よくもあれだけ喧嘩ができるなあとと思うぐらい、激しい勢いで親子喧嘩をするのです。

結局その友人は寺を出て、今は別な道を歩んでいるのですが、その友人がこの頃になってふと思ひ出して、こう言ってくれました。激しく言い争っていたある時、親父が「俺が人間の形をしておるから、お前は私の願ひが聞けないんだろう」と言ったということです。つまり、人間的な反発、父親に対する人間としての反発がいつも先にあつて、その父親が一生懸命に本當に心から願っている願ひが聞けなくなつていくということです。

そのお父さんもある意味で、そういう反発を持つようになつてきたのは自分の今までのあり方だつたという思ひを、やはり自覚というか、深い悲しみとともに懺悔さんげを込めて言われたのだらう思ひます。そのことをこの頃になつて思ひ出し、その友人はしきりに言うのです。それこそ、お父さんが亡くなつてから初めて、その言葉を、願ひを素直に聞けるようになったと言ひのです。私自身も、父親に死なれて初めて親父に遇えたという思ひを強く持つたことがありました。私たち親子は、これはまた、その友人の親子とは正反対で